在米日本人一世のトランスナショナリティ

―戦間期の天理教布教師を事例として―

尾上貴行（天理大学）

はじめに

本稿の目的は、アメリカ合衆国で 1924 年移民法（Immigration Act of 1924、Johnson-Reed Act）[1] が制定された後に、「宗教家」の滞在資格で渡米した天理教布教師に注目し、戦間期のアメリカで「非割当移民」（non-quota immigrant）として在住した日本人一世のトランスナショナリティについて論じることである。近年、日系アメリカ人の歴史研究では、単一国家の歴史観にとどまらない「新たなパラダイム」[2] の必要性が提唱されるようになっている。そして、日本人のアメリカへの渡航や定住様式が多様化[3] していることとも相まって、アメリカと日本の関係史、日本人移民の越境性などに注目した歴史研究が行われている。日本人の渡米者数は、19 世紀後半に急増し、アメリカへ定住する傾向が徐々に強まっていった。しかし、1924 年移民法により日本人の移民がほぼ全面的に禁止され[4]、日本の東アジア進出にともない日米関係が悪化していくなかで、在米の日本人一世たちは、いずれの国においても、自らを周縁的な存在として認識せざるをえない状況に追い込まれた。そして、第一次世界大戦から第二次世界大戦にかけて、排日運動が激化していった戦間期に、彼らは２つの帝国のはざまにおかれることになったのである。移民の越境性を分析する理論の一つであるトランスナショナリズムによる最近の研究では、こうした一世たちを積極的な戦略をもって生き抜いた「トランスナショナルな存在」として再認識している。[5]

従来の研究において日本人一世を論じる際、その対象となるのは 1924 年以前に、主に出稼ぎを目的として渡米し、その後定住した日本人であることが多かった。しかし、戦間期や戦時抑留を経て、戦後もアメリカにのこった日本人のなかには、1924 年以降、「非割当移民」として渡航した者もいた。管見の限り、出稼ぎを目的に渡米したいわゆる日本人「移民」に比べ、彼らに関する研究は多くはない。[6] 彼らも戦間期の日本人一世であったことは確かであり、この人々に注目することは、1920 年代後半から太平洋戦争勃発までの日系移民社会における一世たちを、新たな側面から考察することになると考えられる。そこで本稿では、「宗教家」の滞在資格で「非割当移民」として渡米した天理教布教師を取り上げたい。

幕末の新興宗教の一つである天理教は、1927 年に北米地域における最初の教会をサンフランシスコに設立した。それ以降、日本から多くの布教師が派遣され、1934 年にカナダ、ハワイ準州（当時）を含む北米地域の管轄拠点として、ロサンゼルスに「天理教アメリカ伝道庁」が設置された。こうして、天理教は、開戦前には日系移民社会の主要な日系宗教団体の一つとみなされるようになった。[7] 日本から派遣された天理教の布教師は、一時的な訪問をした者、数年滞在したのち日本に帰国した者、戦時抑留を経て定住しアメリカ市民となった者などさまざまであった。しかし、戦間期にアメリカに渡った布教師たちはいずれも、日本の教会本部や関係

教会と強い繋がりを保持すると同時に、ホスト社会における適応にも苦慮するなど、２つの国家にまたがるトランスナショナルな存在であった。[8] 日系移民社会における彼らの布教活動や生活を明らかにすることは、「非割当移民」として渡米した日本人という視点から、戦間期の日本人一世の多様な経験やトランスナショナリティを考察する上で有効であると考えられる。

本稿では、天理教布教師に注目し、トランスナショナルな視点から、戦間期のアメリカに在住した日本人一世を検証することを試みる。トランスナショナリズムの定義や方法論は、まだ十分に確立されているとは言えない。本稿ではこれを、ナショナル（国家）という枠組みを越えて人・物・カネ・情報が複数国の間で行き来する様子、またその過程で形成・再形成される文化や意識、そしてそれに伴う関係者の越境地社会における適応（受容と変容）の様態やネットワーク構築などを分析する概念と定義し[9]、その結果明らかになった様相や性質をトランスナショナリティと呼ぶことにする。本稿では、まず戦間期の日本人一世や、日系移民社会における宗教に関する先行研究について論じる。続いて、天理教布教師の日記や天理教教会本部関係史料、また移民社会で発行された邦字新聞の記事などから、1920 年代後半から 1930 年代にかけての日系移民社会における、彼らの布教活動や生活について明らかにする。その上で、アメリカ、日本、そして日系移民社会の３つの観点から、戦間期の日系移民社会において、２つの帝国のはざまで生き抜いた日本人一世である布教師たちのトランスナショナリティについて考察する。

１．戦間期の在米日本人一世

（1）戦間期の日本人一世に関する研究

アメリカ本土の日本人移民に関しては、これまで多くの研究が蓄積されている。当初、主に出稼ぎを目的として、単身で渡った男性たちの滞在が延びるにつれ、家族や親族の呼び寄せ、「写真花嫁」との結婚などにより、所帯がもうけられるようになった。そして、しだいに定住の傾向が強まると、西海岸の各地に日系移民社会が形成されていった。しかし、こうした日本人移民の集住、日本の東アジア進出により、主に西海岸でアメリカ人の排日感情が高まっていった。さらに、日本人は帰化不能外国人となり、彼らの土地所有を禁じる種々の法律が制定され、そして 1924 年移民法（「排日移民法」とも呼ばれる）が制定されると、在米日本人一世は、自分たちの将来をアメリカで生まれアメリカ国籍を有する二世たちに託そうとし、また二世たちもアメリカ社会で日系人として生き抜く道を探っていくことになった。同法制定以降、特に 1930 年代は、日系人二世の教育問題が顕著となり、二世とその将来に関する研究も、これまで数多く行われてきた。

このような歴史的流れのなかで、戦間期の一世の存在に関しては、1924 年移民法の制定にいたる種々の日系人排斥運動とそれに対抗する彼らの苦闘、また二世たちが日米間の「懸け橋」となることへの一世たちの期待、日本の帝国化と東アジア進出政策による日米関係悪化とその日系社会への影響などが、主な研究の対象となってきた。あるいは戦時日系人強制収容への前段階としてのアメリカ政府当局の動きなども、強制収容研究のなかで行われてきた。しかし、イチオカ・ユウジは、戦間期を扱った近年の研究において、「一世世代の二世世代に対する関係と影響にもかかわらず、一世が欠落していることが目立つ。戦中の時期の歴史的理解を広げ、深めるために、一世世代の研究をもっと深く追求すべきである」[10]と指摘し、戦間期こそが、「1940 年代、特に日系アメリカ人の大規模抑留などの出来事を正しく理解する鍵になるとみた」

[11]のである。こうしたなかで、トランスナショナルな視点から、一世たちを再評価する研究も進められてきた。

（2）戦間期の一世に関するトランスナショナル研究と天理教の北米伝道

移民研究においては、移住者がホスト社会に、どのように、あるいはどの程度「同化」するかは、大きなテーマの一つである。近年では人の移動や移住形態が多様化しており、複数国を頻繁に行き来し、一つの国や社会に「同化」しない観点から移民を考察するトランスナショナリズムが注目されている。[12] これは、従来の研究に大きな影響を与え、出移民や入移民など、母国と移住先にそれぞれ個別に焦点を当てた研究と異なり、２つないしはそれ以上の国家や社会を視野に入れて、移民たちの移動、思考、諸活動などを考察するものが増えてきている。

東栄一郎は、「アメリカにおける日系人史という研究分野では、1930 年代のトランスナショナルな結びつきによって作り出された移民の複雑な政治的活動について、本格的に議論されたことはほとんどないのである」[13]と述べ、その分析にはトランスナショナルな視点が不可欠だと主張する。そして東は、一世たちを国家と国家の間におかれた存在として、「間・国家間」という視点から、二世教育における彼らの姿勢を論じている。日本人の一世は帰化不能外国人であったが、彼らのなかには、日本人の民族性やその精神はアメリカ民主主義にも充分対応し得るものと考える者がおり、二世教育に日本精神を求めることは、彼らにとって「アメリカ的」なことであった。東によれば、一世たちが考えた日本精神は、日本にいる日本人が考える「身心を天皇陛下に献納して皇運を扶翼する純正なる精神」[14]とは異なっていた。彼らは、日本精神を「古き時代の日本の倫理を具現化したもの」であり、「二世を卓越したアメリカ市民に育てる道徳的基盤、つまり子どもたちがよきアメリカ市民として成長するための糧となる教訓や行動規範を教える手段」とし、「アメリカニズムに互換性がある」[15] と考えたのである。このようにして東は、「競合する国家権力と国民理念のはざまで生活した一世は、アメリカ白人社会と帝国日本のいずれとも活発に交渉し、関わり合い、しばしば協力・共謀関係を築いた」[16]と戦間期の一世を分析している。

こうした戦間期の一世たちが、ホスト社会へいかに適応したのかを考える上で、宗教は大きな要素の一つである。日本人がアメリカに定住し、移民社会を形成していく過程において、日系宗教、特に日系キリスト教と仏教が果たした役割は大きく、またその役割において、日本や日本文化との繋がりの有無やその程度が一つの論点になってきた。歴史的にみると、1870 年代に、日系宗教の活動は日系キリスト教が在住する日本人たちを物心両面でサポートすることから開始した。その一方で、次第に日本人たちの滞在が延びるにつれ、冠婚葬祭の必要性も生じたことなどから、仏教の各派が進出している。先行研究においては、各宗教の歴史や日系移民社会における役割を論じたもの、キリスト教と仏教を比較して考察したものなどがある。[17] また日系キリスト教と仏教に数十年遅れる形で活動を開始した新宗教系の金光教、天理教に関する分析もある。[18] いずれも日系移民社会が形成されるなかで、宗教的側面のみならず、政治、経済、社会的側面においても重要な役割を果たしていった様子が明らかにされている。また、日本との関係性から日系宗教を論じているものもある。[19]

戦前から現在にいたる、天理教のアメリカ伝道の歴史にみるトランスナショナリティは、天理教布教師と信者が日米間を往来し、アメリカ社会に適応していく過程で、国や地域を越えた天理教ネットワークの構築、維持、継承が行われている点にみられる。本稿で注目するのは、戦間期に渡米した布教師たちが、日系移民社会で行った布教活動とその布教生活における、「二

国に挟まれた（それを超越するのではない）彼らの日常生活体験とそこから派生する思考パターン」[20]である。また、東は、二つの国家に対して、移民社会の一世たちが、「どちらか一方だけを選択することを拒み、むしろ日米両国の事物間に生じるさまざまな矛盾に対しては折衷的なアプローチをとることを選んだ」[21]と分析している。本稿では、この「折衷的なアプローチ」という視点から天理教布教師の生活誌を検証することで、戦間期の一世たちへの考察を深めたい。

２.「非割当移民」としての天理教布教師

（１）北米の天理教概略

天理教は、1838 年に中山みきを教祖として始まった宗教であり、19 世紀後半に日本国内で急速に伸展した。しかし、世界中の人々を救済するという教えが根底にあること、国家の宗教政策に反するとして、明治政府当局から教会本部の活動に厳しい監視と規制が行われたことなどから、19 世紀末に日本国外へ積極的に新たな活動の場をもとめていくことになった。こうして天理教は、1893 年に開始した韓国での布教活動を嚆矢に、朝鮮半島、台湾、中国大陸で活動を展開していった。

アメリカ本土での伝道は、1896 年に 19 歳の青年布教師が渡米し布教活動を行ったのが、嚆矢とされる。[22] また同時期には、就労を目的として多くの日本人がアメリカ本土に渡るようになり、そのなかには天理教の教師や信者も多数含まれていた。彼らのなかには、過酷な労働に従事するかたわら布教活動を行なった者がいた。1920 年代後半からは、組織的な布教活動が開始され、1927 年に最初の教会がサンフランシスコに設立された。以後、シアトル、オークランド、ロサンゼルスなどで次々と教会が設立されていった。1934 年にハワイを含む北米地域を統括するアメリカ伝道庁がロサンゼルスに設立され、北米地域での天理教ネットワークの構築も試みられた。しかし、太平洋戦争が開始されると、主な教会長や布教師は FBI によって逮捕され、抑留所に収容された。また逮捕されなかった教信者も、他の日本人と同様に、強制立ち退きにより、各地の収容所での生活を余儀なくされた。

戦前のアメリカにおける天理教の布教活動の特徴としては、日系移民社会を基盤とし、在住する日本人一世を主な布教対象としたこと、日本の布教形態と同様に一軒一軒家を訪ねる「戸別訪問」と「さづけ」とよばれる病気治しを行ったこと、設置された教会や布教拠点が日系移民社会における日本の情報提供の場として機能したこと、日本国内で天理教の悪評により、日系移民社会でも反天理教的環境が存在したことなどがあげられる。[23] 天理教は、日系キリスト教や仏教などの既成宗教が当時あまり行わなかった病気治しにより、日本人たちの宗教的要求を満たし、また「周縁的な立場の人びと」を対象とすることで、新たな宗教的選択肢の一つとして宗教界に参入していった。[24]

（２）1924 年移民法と天理教布教師

1924 年移民法は、「排日移民法」とも称され、帰化不能外国人とされた日本人の移民をほぼ全面的に禁じた法令であった。これまで、その成立過程、日系移民社会や日本社会での反対運動、制定後の影響などについて、さまざまな研究が行われている。一方、「非割当移民」としての日本人は入国、在留が可能であったが、管見の限り、この分野に関して詳しく論考した研究は多くない。天理教の布教師たちが該当した条項は、1924 年移民法の Section 4 の (d) であっ

た。[25] この条項で規定されていたのは宗教家、大学教授などであった。アメリカへの入国の申請をする時点で、申請希望の滞在資格において最低２年間の職業経験があり、その職業の目的においてのみ入国を希望する者が対象となっていた。配偶者や 18 歳以下の子供たちを同伴することもできた。また、労働省では、宗教家とは、認可された宗派や教団によって正式に認められた人物であり、キリスト教あるいは非キリスト教の宗教的集会を行い、宗教的秘儀などの儀礼を執行する人物であると解釈していた。[26] つまり、入国までに少なくとも２年間は公式な資格のある宗教家として勤めており、またその宗教上の職務遂行のためにのみアメリカへ入国するという条件において、「非割当移民」として認められた。労働省の規定では、叙任されていない修道女や宗教者は、「宗教家」としての非割当に該当しなかった。

天理教の北米伝道従事者には、さまざまな人々がいた。教会本部から正式に認可された天理教教師ではない信者たちのなかにも、積極的に布教活動に関わっている者が多数いた。これは、天理教の北米伝道、あるいは天理教全体としての伝道形態の特徴でもあった。たとえば、モンタナ州、ワシントン州、カリフォルニア州などでは、1900 年頃から、出稼ぎや家族への合流を目的として渡米した天理教の教師や信者たちが、徐々に生活が安定していくなかで、就労しながらも個人的に布教活動を行っていた。やがて、天理教の布教活動が徐々に活発になり、組織的な伝道が計画されるようになると、1927 年に初めて「宗教家」としての資格で、天理教の教師がアメリカに渡った。それ以後、1937 年までの間に、「宗教家」としてアメリカ（ハワイ含む）、カナダに入国した天理教布教師は 100 人近くに及んだ。[27] そのなかには、巡教のため訪米した数ヵ月の一時滞在者も含まれていたが、多くは１年以上の長期滞在者であり、さらに戦中の抑留や収容体験を経て、戦後も在住することになった者もいた。

「非割当移民」の「宗教家」としての天理教布教師の渡米手続きの実際は、次のようなものであった。[28] 1924 年移民法に規定されているように、まず布教師は天理教の「教師」に任命されてから満２年以上の布教経験を有する必要があった。その上で、在日本アメリカ領事館から査証を得るために、天理教管長の任命証や外務大臣下付の渡航免状などが必要とされた。外務省への申請は、地方の警察署を経由して行い、1928 年の兵庫県の例では「一、戸籍謄本一通、一、履歴書一通、一、身分証明書（市町村でくれるもの）一通、一、写真二枚（大きくないもの）、一、戸主の場合は遺族の生活保証書一通（誰れでもよい）、一、戸主以外の場合は戸主の承諾書一通、一、布教費並びに生活費の保証書一通、一、郵船等級、其の他に布教理由書様のもの」[29] が必要であった。その後、府県庁が外務省に具申し、１カ月から２カ月で渡航券が外務省から下付された。次に領事館に出頭し、その渡航券とともに、天理教管長からの任命書、戸籍謄本、布教費生活費の引受書、領事館指定医による健康証明書などを提出する。そして、領事によって面接が行われ、合格すれば査証が下付された。

「宗教家」資格で渡米し、1928 年４月から７月まで滞在した天理教の教会長諸井忠彦は、天理教布教師の渡航、入国、滞在に関して、自身の経験を踏まえ、考慮すべき事柄として、次の点をあげている。[30] まず、検疫官の検査と移民官の調査の２段階に分け、移民官の調査については、「船客等級」、「入国者の人格」、「着陸後の保護人」、「確実なる回答」、「上陸前に移民官付弁護士に交渉しおくこと」、「布教師は労働に従事するを得ず」「布教費の支出確実」、「上陸の際故障ある者はエンジェル島へ抑留せらる」、「税関史の手荷物調査」、「上陸後は直に領事館並に日本人会に出頭登録を要す」など留意すべき点を記している。また、アメリカ到着後に速やかな入国許可を得るために、「渡米者は写真に履歴書を前以て米国の知己（到着地所在の教会を可とす）に送り予め移民官附弁護士の諒解を得て置くこと」[31] とも述べている。このように、

布教師たちが無事にアメリカに入国するまでには、査証申請準備から実際の入国に至る一連の手続きを、慎重かつ丁寧に進めていく必要があったことがわかる。

３．天理教布教師の生活誌

（１）布教師の日記

布教師たちは、日系移民社会における布教活動として、「新聞、講演、文書などの宣伝」、「白人伝道に力を注ぐこと」、「宗教座談会、子供会、家庭集会等を開き神言を台にして宣教すること」、「言語、風俗、習慣、凡て勤めて米化すること」などを目標に掲げ、具体的な方法として「病人助け」、「病院訪問」、「家庭集会」、「講演会」、「新聞利用」、「宣伝文広配」などを行った。[32] そのなかで、天理教紹介の映画を含む「講演会」はしばしば開催され、日本人たちに好意的に受け入れられた。たとえば、1928 年にシアトルで行われた際には、「非常なる盛会にて聴衆五、六百名満員の状態を呈し候」、またポートランド市の精養軒ホールでの開催では「聴衆二百五十名位にて盛大に催され候」[33]と、かなりの参加者を得ていた様子がうかがえる。布教師が個人でこのような講演会を開催することは難しく、組織的伝道によって可能となる布教形態の特徴であったといえる。一方で、日本国内で実践されていた「まだ天理教の教えが広まっていない地へ、布教者が着のみ着のままで出かけてゆ」く「単独布教」[34]は、アメリカの布教師たちの間でも布教活動の基本となっていた。この様子は、布教師たちの日記や手記などにおいてもしばしば記されており、本稿では、吉澤実と布野光蔵という２名の布教師が残した日記と手記から、その様子をうかがうことにする。

吉澤実は、名古屋にある天理教名京大教会から、アメリカ伝道に従事する布教師として 1928 年４月に派遣され、1935 年 12 月に帰国するまでの７年８カ月の間、カリフォルニア州北部のサンフランシスコ、サクラメント、オークランド、バークレーなどで布教を行った。[35] 吉澤は、1928 年４月の日本出発から 1934 年 12 月までの日記を、全部で十数冊の手帳に記している。[36] 一方、布野光蔵は、同じく名京大教会から派遣された布教師で、吉澤が派遣された翌 1929 年２月に渡米し、主にワシントン州シアトルなどの北西部を中心に布教活動に従事した。日米開戦と同時に「危険な敵性外国人」として逮捕、抑留された。1946 年の釈放後は、ニュージャージー州のシーブック農園で就労。その後、シアトルにあったワシントン教会を復興して３代会長に就任し、シカゴに定住した。ノートに記された手記は全部で３冊あり、その内容はそれぞれ、出生から渡米まで、アメリカでの布教道中、抑留生活時代となっている[37]。

（２）布教師の日々の布教活動と信仰実践

吉澤や布野の日記や手記の主な内容は、布教活動の記録、布教方法に関するメモ、また個人的な信仰上のさとりなどである。日系移民社会が活動と生活の中心であったためか、アメリカ社会全般に関する言及が多いとはいえない。ただし、布教対象が移民社会の日本人一世と二世であったことから、日本人家庭を順々と定期的に訪問した様子、当時の日本人家庭の諸事情や病気に関する事柄、また内地人と日系人の比較などの記述がしばしば現れてくる。当時の移民社会における日本人たちの生活の一端がありありとうかがわれる。そこで、これらの布教師の日記とあわせて、教会本部関係史料、邦字新聞記事なども活用しながら、1920 年代、1930 年代の天理教布教師の布教活動や生活について明らかにしたい。

吉澤と布野は、日々布教活動に歩いている様子や、数人の人々を集めて行った「家庭集会」

などを次のように記している。

> S 姉の友人から誘って貰い、話しだけでも毎日午后は座り通しで茶を喰みつつ、御話を伝えた。隣接の両家、M 夫人　G 夫人、T 夫人に、S さんの友人、同郷人の U 夫人と其の隣りの N 夫人等集まられ、何れも熱心に御話を聞いて下さつた。中にも G、N 両夫人は事情も在つて、熱心に教を乞はれた。U 夫人も S さんの近しい友人の情に引かされ、M 夫人も隣りだから、毎日の如く、午后は四、五人から多い時は七、八名、パーラで話したり聞いたり取次いたりして、殆んど外出するイトマ無き程に、次々に訪ねて来られた。御道の未だ珍しい時代でも有り、それだけ新鮮なものを、事に深く味はれたからでもあった。斯うして、第一回のオレゴン布教も順調に運んで、六日間の布教も成功で、一ト先づシアトルに帰った。[38]

> 朝 7 時から I 様お宅へ向って歩き出す。8 哩をてくてく行く。親切な白人に助けられ、行きつもどりつ 10 時半着。親切なもてなしをうけ、お心づくしを頂き、帰途はタクシーを頂き勿体ない。それより K さんのお宅をたづね、今日はゆっくりお話をして、6 時半停車場にゆき、6 時 50 分発。8 時半帰会す。[39]

このように、布教師たちは、日系移民社会を奔走し、さまざまな日本人家庭を訪ねては、教えを説いてまわった。

また、吉澤と布野の日記や手記には、移民社会の周縁の人々や病気に苦しむ人たちのことが、度々次のように記されている。「毎日次から次へと病人と病院を廻った。ゼネラル病院に K、I、N の三氏を訪ね、シスター病院に E、Y、J、O の四氏を、毎日の如くに見舞ふて、話を取次いだ。」[40]、「午後ハイランド病院へゆく。生憎子供の面会日は月、水、日曜日との事にて、暫く表にて立て、出入する日本人を待てど誰もなし。帰途 E. 17 街にビラ配りをして帰会。」[41]、「バークレー病院の病人をさがす。時間外に教へてくれた人を病人と間違へて産婦なりし。お祝の辞をのべて帰る。それより N 氏をたづね、お見舞ひを申上ぐ。夜 S 氏腰が痛むとか見舞ふ。」[42] こうして彼らは、病気治しの「さづけ」を取り次ぐ機会を求めて、さまざまな病院をしばしば訪問していた。[43]

さらに信仰実践の一環として、布教師たちは、教会や布教拠点に供えられた食料などを、定期的に訪問する日本人家庭や、布教の道中で出会う人々に分け与えたりしていた。また逆に彼らが、種々の食料や衣服をもらうこともあった。吉澤の日記からは、「午前 S 様方へあづきの御飯に供物など持参す。午後 U 様ミシンにお来会、種々お心づくしの品々を頂く。それよりオークランドへお連れ頂く。郵便局にて T 氏の手紙三通を。F 方を見舞ひ、G 方にお助けし、Y、M、T、H もお寄りし御供様をお渡しす。七時帰る。」[44]「リッチモンド D 方を訪ね、お供物の御礼を申上げ、帰途には母上方よりも種々の心づくしの野菜に花など頂き帰る。」[45]「I 方、Y 方へと房子が出さして頂く。子供の靴を I 方より、お魚を Y 方より頂き帰る。夕方には Y 氏がサンピードロの親からと、美味なるマグロを御持参下さる。勿体なし。夜は M 方を訪ね、頂いた花を差上げ喜で頂く。」[46]など、移民社会のなかで、互いにたすけあう姿もうかがえる。

高橋典史は、ハワイの天理教について、「『病気治し』などの呪術的・祈祷的行為を行って教線を拡大していった」と考察し、これは、日系キリスト教や仏教などの日系移民社会で主流をなす既成宗教体があまり担わなかった領域であり、天理教伝道の特徴をなしていると述べてい

る。[47] また、カナダのバンクーバーで発行されていた『大陸日報』の 1935 年の記事は、日本の教会本部で開催された大会に、日本国内だけでなく、「朝鮮、満州、樺太、志那、台湾、南洋、布哇、北米など」からも参加者があり、非常に盛大に開催されたことに触れている。そして、その大衆を引きつける理由として、「聞く所によると布哇に於ける天理教は金を取らずに貧窮者、無産者、病者等を救済し、一方では階級打破、博愛平等、無欲愛他の信仰に即し以て天理を奉じて一切衆生、これ兄弟なり親子なりとの信念を実行してゐると云ふ話である。そして癩病患者、肺病患者でも両手で懐き、死生を超越して、宇宙の大愛の中に生き、不退転の精進を続けてゐる所に教勢の大をなしてゐる所以である。」[48] と報じている。このような状況は、アメリカ本土でも同様であった。アメリカの布教師たちは、各地の病院を訪れて、病気治しを行うと同時に、「酒の中毒にかかっている人」、「バクチ」にはまっている人、女性とのトラブルが絶えない人[49] など、日系移民社会のなかでさまざまな問題を抱える日本人たちの救済を試みている。こうして、天理教は、社会の周縁にいると見なされた人々や病気に苦しむ人へたすけの手を差し伸べ、日本人たちとの密接な触れ合いを通じて、日系移民社会においてその存在感を増していったと考えられる。

４．トランスナショナルな視点からみた戦間期の天理教布教師

（1）「宗教家」としての天理教布教師とアメリカ社会

1924 年以降に渡航した天理教布教師たちは、「宗教家」という資格で在留することになった。そのため、入国するには、2.（2）で述べたような条件を満たすことが必要不可欠であったが、この滞在資格の条件により問題が生じることもあった。1934 年の地元英字新聞には、「政府当局、日本人牧師を送還」との見出しで、教師としての２年間の職歴がなかったため、ある天理教布教師が強制送還されることになったとの記事がみられる。[50] また、教会本部の機関誌では、「布教師は労働に従事するを得ず」という記事のなかで、「布教師が労働に従事する事は禁ぜられて居るので、若し発見されれば直に送還される。……内地の如く労働して布教費を作り布教の費に当てんとする考は米国に於いては全然実行不可能である。」[51] と報じられている。このように、「宗教家」として滞在している場合は、アメリカで労働を行わないように、教会本部内でも渡航前から再三注意が喚起されていた。また布教師たちは、アメリカ在住中に、移民局からの呼び出しを受け、就労していないか確認されることもあった。[52] こうして、滞在資格条件の順守が厳格に求められたのである。

布教師たちは、滞在に十分な財政状況を証明して査証を取得し、アメリカへ入国していた。しかし、彼らにとって、実際の滞米中の生活費や活動費などの財政は厳しかった。天理教の伝道史に多くの著作がある高野友治によれば、この当時、布教師一人のアメリカ派遣費は 1,000 円ほどで、当時の大学卒月給 60 円、専門学校卒 40 円からすると、約２年分の給料が必要であった。[53] 1934 年にアメリカ伝道庁の初代庁長として赴任した辻豊彦は、当時の様子を、天理教の海外教会では信者から会員費を徴収しておらず、布教従事者も固定した給与を受けていない。天理教布教師はただ信者からの自発的な寄附を受けているだけである、と述べている。[54] このため、移民としてすでに在住していた教信者、また新たに入信した人々などによる財政的援助が、布教師たちの滞在と布教活動において不可欠であった。また布教師たちは、活動費や生活費を捻出するために、移動手段として電車に乗らずに歩いて節約したり、自分の衣服などを売ったりしていた。信者からの寄付は金銭だけではなく、食べ物、衣類などによるものもあ

った。さらに、日本の教会や親族から送金を受ける場合もあった。吉澤は、「大町より手紙を頂き、同封六円を頂く。勿体ない事である。」[55] 「朝早速、国からの心づくしの品々を開き、神前に供へてお礼申上げる。待ちかねる子供達大喜び。親より手紙只勿体ないことばかり、いつになったら親孝行が出来る事やら。」[56]などと記している。

「宗教家」としての布教師たちは、アメリカへの入国と滞在の資格という点では保証されていた。しかし、教会本部や在米教会からの財政援助は限定的であり、布教活動や生活をささえる費用は、移民社会の日本人信者の寄付や日本の教会関係者や親族からの送金などでまかなっており、その財政状況は困窮を極めていた。信者の寄付を基本とすることは、日本における信仰実践を踏襲したものであり、布教師たちにとって不自然なことではなかった。しかし、母国を離れたアメリカという外国において、例外的に入国、滞在を許可された「宗教家」としての立場を、彼らは明確に感じることになったのである。

（2）２つの国家のはざま

移民は、母国を離れホスト社会での生活を始めることで、「国家」を意識するようになるといわれる。天理教の布教師たちも、国外での布教活動に従事するなかで、日本という「国家」とアメリカという「国家」を意識するようになったと考えられる。そこには、日本国内で行う布教活動とは異なる要素が生じ、また「日本」という「国家」、日本人という「民族」を背負うという意識が生まれることになった。その意識は、教会本部の機関誌の記事にもみられる。

> 本教の布教師は、海外に於ては全日本民族の代表者である。海外に於ける日本人の悪徳不正義は、すべて本教布教師にかかって来ることは、日本に於けるクリスチャンが、米国政策の不純なるが為めに迫害されると同一である。本教の信仰と、国家政策の衝突が、若しも萬一起つて来るとするならば、この問題は何処に行くべきか？　この日こそ本教に於ける一時の試練であって、この日こそ本教は宇内に対して教祖立教の大旨を明言すべき日であることと思はれる。[57]

また、アメリカの布教師たちは、教会本部の機関誌に、「米国に於ける物質文明の発達は将に世界の支配者たろうとして居りますが、精神的には甚だ寒心に堪へぬものが多いのに驚かされるのであります。」[58]「吾々日本人は一部の表面的な欠点があるにせよ、たとへ無意識にでも魂の底に根本的な尊い良きものを持つ世界最優秀民族であると云ふ事をつくづく私は感ずるのである。」[59]などと寄稿していた。アメリカは物質文明においては進んでいるが、日本に比べて精神文明は遅れていると考え、彼らはそこにアメリカ社会における天理教の布教伝道の価値と意義を見出そうとしていた。また 1936 年に開催された教祖 50 年祭にむけて、1930 年 10 月 26 日に発布された「諭達第５号」では、「人類更生」がうたわれ[60]、日本人すべてを天理教の信者となし、天理教の教えによる精神的な社会改革を目指した「人類更生運動」が展開された。これは、天理教の教えを知ることによって、日本人がその精神性を高めることを目指したものであり、日本国内だけでなく、海外でも実施された。前述したように、当時のアメリカの日系移民社会では、日本の伝統的な倫理感である「日本精神」を２世に教育することは、アメリカ社会で生き抜くうえで有効であるとの考え方もあったことから、天理教の「人類更生運動」は、移民社会での「日本精神」教育の促進につながるものともなった。

しかし、このような精神的な社会改革を目指した活動は、在米の布教師たちに２つの「国家

のはざま」を意識させることになった。その一例は「国旗」の掲揚にみられる。吉澤の日記には、1928 年４月 29 日の天長節に天理教の教会で日本の国旗を出そうとしたところ、次のようなやりとりがあったと記されている。「日本の国旗を出すことは遠慮して貰ひたい」、「なぜ日本人が母国の国旗を掲げるに不服がありますか」、「日本人会から注意がありました」、「今日は一体どふゆふ日ですか。今生陛下第一回の天長節ではありませんか。何も気兼ねはいりません。それでは米国ゝ旗と仲よく交又して掲げませう」、「問題になるから止めて下さい」。しかし一方で、吉澤の日記には、同年５月 20 日の同教会の月次祭に、「屋根には米国々旗が翻って」おり、また 1934 年９月３日のアメリカの労働祭には、「米国の旗を表に掲げて祝意を表す、子供の喜ぶ」などと記されている。つまり、天理教の祭典日に日本の国旗に並べてアメリカの国旗を掲揚したり、アメリカの祝日にアメリカの国旗を掲げたりしていたのである。こうした布教師たちの記録からは、数年の滞在の間に、彼らのなかで、日本の国威発揚という意識と同時に、米国国旗を掲げることへの抵抗感が軽減し、あるいは現地の慣習にならうという姿勢から、アメリカ社会へ順応していく姿もうかがわれる。

（３）日系移民社会における「周縁化」

東栄一郎は、戦間期の一世を評して、「日本とアメリカに由来する人種と国家の定義が競合するトランスナショナルな状況では、それらの概念が持つ意味合いのギャップは一国の文脈のそれに比べ格段に広がり、一世は、拡大する人種と国家の裂け目を目の当たりにしながら、いずれの国からも真の意味で受け入れられることなく、そのはざまをさまよい続けたのである。」[61] と述べている。つまり、戦間期の一世たちは２つの帝国のはざまに立たされ、両社会から周縁化された存在であったといえる。ここまで本稿で論じてきた戦間期の日本人一世としての天理教の布教師は、日本とアメリカの両国からだけでなく、さらに日系移民社会においても「周縁化」された存在となっていた。

日本社会で、「邪教」と評されることもあった天理教[62]は、アメリカの日系移民社会においてもその影響をまぬがれることは出来なかった。ある布教師は、移民社会での日本人相手の布教活動の困難な点として、「移民として行った人達は、現在は最早相当の年配の人もありますが、その人達は以前の天理教を知って今日の本教を知らない為に、一も二もなく軽蔑して仕舞ふ」[63] 傾向があると述べている。ある仏教会で行われた講演会に参加した際、開教師が天理教を攻撃する姿を目の当たりにした布教師もいた。[64] また、カリフォルニア州で、ある天理教教会が設立奉告祭を行った際、天理教関係者の他には、神道関係の人が 2、3 人参集した以外は誰も訪れないということがあった。吉澤は、その様子を「社会的に認められぬお道の常の例として、領事を初め新聞記者に至るまで一人の姿を見ず」[65] と述べている。戦時中、主に西海岸に在住する日系人は強制的に立ち退かされ、収容所での生活を余儀なくされた。その施設の一つであったアリゾナ州のヒラリバー収容所における日系宗教に関する政府当局の報告書には、仏教の開教師が天理教の教えを風変わりで迷信的なものでありくだらないと考える傾向があり、また一世たちの多くは天理教信者を見下し、二世たちは天理教に関わりを持たないようにしている、と記されている。[66] このような状況は戦時中に始まったことではないと考えられ、戦前の日系移民社会における天理教布教師に対する日系人たちの視線の一端がうかがえる。

アメリカの布教師たちが、日本で起こった事件の影響を、移民社会でそのまま受けることもしばしばあった。特に 1935 年末から 1936 年にかけて発生した天理教教会本部の「脱税疑獄」は、邦字新聞で、「故国宗教界異変　脱税疑獄の不正事件で天理教挙げらる　内部では本部反対

者が宗教搾取でスローガン投ず」[67]、「宗教界の異変続報　天理教の本部を峻烈に取調ぶ　金庫を開けて書類押収」[68]などと、大きく取り上げられた。また、天理教布教師に関連する事件なども、「『奉納金が多いほど病気の全治が早い』と多額の奉納金取得の天理教布教師詐欺罪で告発　全国数百万の天理教徒の大問題と注目さる」[69]、「天理教布教師の妻　神を恨んで自殺を計る　中風患者を全治させようと祈願したが顕なき為」[70]などと報道された。このような記事が報じられる度に、布教師たちは、その悪影響が及ばないように、移民社会の日本人たちへ対応することになった。

戦前の日系移民社会の一世たちは、さまざまな面で日本との繋がりを保っており、日本社会と日系移民社会の間には、地域社会レベルでの「トランスローカルな関係」が構築されていたといえる。新興宗教の１つであった天理教は、日本社会において、政府の方針といった政治的側面や一般市民の評判といった社会的側面での影響を受けることが多かった。トランスローカルな性質をもったアメリカの移民社会においても、布教師たちは日本国内での影響を受けることになり、その結果として周縁的な存在とみなされることも少なくなかったのである。

おわりに

本稿では、日本人一世たちがホスト国アメリカと母国日本の２つの帝国のはざまで揺れ動いていたとされる戦間期に、「非割当移民」として布教活動を目的に渡米した天理教布教師たちの存在に注目し、彼らの日記や手記を紐解いて、当時の天理教教会本部関係史料や現地新聞の記事を掘り起こしながら、その布教生活の様相を検証した。そこには、天理教布教師が、他の日本人「移民」一世と同様に日米間でのトランスナショナリティを有する一方で、例外的に入国、滞在を認められた「非割当移民」としての制約をもっていたことが明らかになった。母国を離れた他の国家においては、「宗教家」としての滞在は許可されたものの、その資格外での活動は許されず、布教師たちは国家という枠組みによる規制を意識することになった。また、天理教の教えを広めると同時に、日本人としての母国への敬意とその国威の発揚を意識する一方で、アメリカのホスト社会にいかに適応するかが、布教を推し進める上でも、また日々の生活を過ごす中でも避ける事の出来ない課題となり、布教師たちは国家間のはざまに揺れる存在となっていた。つまり、彼らは、母国とは異なる他国の環境において越境的な立場におかれ、時としては折衷的なアプローチを必要とする場面に直面したのである。さらに、日本社会と強い繋がりを持つ「トランスローカルな」移民社会において、日本での状況を反映して、天理教布教師は「周縁的な存在」となっていた姿も明らかになった。しかし同時に、経済的に困窮した人々や病気に苦しむ人々と共に生きるという彼らの姿勢により、日本とアメリカの両社会で周縁的な存在となっていた日本人一世の精神的な救済に貢献し、相互扶助を実践する姿もみられた。こうした布教師たちの生活誌を紐解くことは、宗教家としての側面を描き出すだけではなく、戦間期を生きた日本人一世の多様性の一端を明らかにすることにもなったと言えるだろう。

現在ロサンゼルスに在住する、戦後新たに渡米した日本人「新一世」について、山田亜紀は、「コスモポリタンなライフスタイルが可能になった現在では、米国文化と米国社会への同化を控えることもできる。逆に、日本を離れているにもかかわらず、新一世の間にトランスナショナリティが顕著に現れ、日本人移民コミュニティとコミュニティの施設で社会関係を築き、子供に流暢な日本語と日本文化への理解を身につけさせながら育てるなどの現象も見られる。」[71]と分析している。グローバル化が高度に進んだ現代社会においては、人々が複数の国々を行き

来することが容易になっている。その渡航や滞在の目的、形態、期間も多様化するなかで、新しい環境で生活するにあたり、ホスト社会への「同化」が必ずしも不可欠であるとは言えなくなっている。また山田は、戦前に渡米した「旧日系移民は、強力な『エスニック・コミュニティ』を創造し、自らの文化や価値観、伝統を守り抜いてきた。同じような現象は、第二次世界大戦後に渡米してきた新日系移民のコミュニティにも観察される。それゆえ、旧日系移民に対する観察は、新日系移民を理解する際のガイダンスになりうるだろう。」[72]とも述べている。本稿は、天理教布教師の生活誌をトランスナショナルな視点から分析することによって、戦前の日本人の渡米目的や滞在形態の多様性の一端を明らかにした。このように戦間期の日本人一世布教師のトランスナショナリティを考察することは、戦前のみならず現在の日本人の移動や移民に関するトランスナショナルな研究の上に貢献しうると考えられる。天理教に関する更なる調査、また他の宗教におけるトランスナショナリティの研究をも今後の課題としたい。

【注】

1) Immigration Act of 1924, United States Statutes at Large (68th Cong., Sess. I, Chap. 190), pp.153-169.

2) 「新たなパラダイム」に関しては、Takaki, Ronald, *Strangers from A Different Shore: A History of Asian Americans* (Boston: Little Brown, 1998) やイチオカ・ユウジ『抑留まで―戦間期の在米日系人』、彩流社、2013 年などを参考にした。

3) 日本人の多様性に関しては、南川文里「アメリカ合衆国における『ジャパニーズ』の類型化―トランスパシフィックなエスニシティ理解のために―」米山裕、河原典史編『日本人の国際移動と太平洋世界―日系移民の近現代史』、文理閣、2015 年、47～70 頁を参照。

4) 本稿で論じる「非割当移民」は例外とされ、条件を満たせば入国、滞在が許可された。"Exclusion from United States." Sec. 13 (c), Immigration Act of 1924, United States Statutes at Large (68th Cong., Sess. I, Chap. 190), p.162 参照。

5) Azuma, Eiichiro, *Between Two Empires: Race, History, and Transnationalism in Japanese America* (New York: Oxford University Press, new version, 2005)［東栄一郎『日系アメリカ移民　二つの帝国のはざまで―忘れられた記憶 1868-1945』（飯野正子監訳、長谷川寿美他訳）、明石書店、2014 年、及び Azuma, Eiichiro, *In Search of Our Frontier: Japanese America and Settler Colonialism in the Construction of Japan's Borderless Empire* (Oakland, CA: University of California Press, 2019) を参照。

6) Daniel H. Inouye は、著書 *Distant Islands: The Japanese American Community in New York City, 1876-1930s* (Louisville, Colorado: University Press of Colorado, reprint version, 2019) で、戦前のニューヨークの日本人について論じるなかで、駐在員や留学生などの一時滞在者である「非移民」（non immigrant）について言及している。

7) 在米日本人会事蹟保存部編纂『在米日本人史（２）』復刻版、PMC 出版、1984 年、455～456 頁。

8) 本稿執筆にあたり特に参照した天理教に関するトランスナショナルな研究は次の通り。高橋典史『移民、宗教、故国―近現代ハワイにおける日系宗教の経験―』、ハーベスト社、2014 年；野口茂「南米南部における天理教異文化伝道の展開―伝道者と受容者の語りを中心に―」『アメリカスの天理教―南北アメリカにおける伝道の諸相と展望』、天理大学附属おやさと研究所、2011 年、51～81 頁；山倉明弘「在米天理教布教師戦時抑留のトランスナショナルな文脈―満州、日本、アメリカ―」『アメリカスの天理教―南北アメリカにおける伝道の諸相と展望』、天理大学附属おやさと研究所、2011 年、1～49 頁；Yamakura, Akihiro, "Transnational Contexts of Tenrikyo Mission in Korea: Korea, Manchuria, and the United States," in *Belief and Practice in Imperial Japan and Colonial Korea*, ed. by Emily Anderson (Gateway East, Singapore: Palgrave Macmillan,

2017), 153-176；山田政信『新宗教のブラジル伝道』、天理大学附属おやさと研究所、2018 年。

9）トランスナショナリズムに関しては、Schiller, Nina Glick and Thomas Faist ed., *Migration, Development, and Transnationalization: A Critical Stance* (New York: Berghahn Books, 2010) と Vertovec, Steven. *Transnationalism* (New York: Routledge, 2009) を参考にした。

10）イチオカ、前掲書、30 頁。

11）同上、17 頁。

12）たとえば、2019 年 6 月 29 日（土）と 30 日（日）の両日に亘って開催された日本移民学会第 29 回年次大会のテーマは「移民と〈トランスナショナル〉」であった。

13）東、前掲書、285～286 頁。

14）同上、226 頁。

15）同上、227 頁。

16）同上、375 頁。

17）日系移民社会における日系宗教の役割については、次の文献を参照した。本多千恵「キリスト教社会における日本宗教の布教ストラテジーと適応」『年報社会学論集』第 7 号、1994 年、73～84 頁；同志社大学人文科学研究所編『北米日本人キリスト教運動史』、PMC 出版、1991 年；飯野正子「BC 州の仏教会と日系カナダ人コミュニティ」『東京大学アメリカ太平洋研究』第 2 号、2002 年、45～61 頁；島田法子「ハワイにおける日系仏教にみる文化変容とアイデンティティ」『立教アメリカン・スタディーズ』25、2003 年、33～51 頁。

18）日系移民社会における日系新宗教に関しては、次の文献を参照した。井上順孝『海を渡った日本宗教―移民社会の内と外』、弘文堂、1985 年；高橋典史「日系移民社会と日系新宗教：ハワイの天理教の場合」『一橋研究』33（１）、2008 年、47～60 頁；尾上貴行「戦前のアメリカ日系移民社会における日系宗教：天理教の展開とその特徴について」『天理大学おやさと研究所年報』23、2017 年、25～46 頁；尾上貴行「戦前から戦後復興期のハワイ日系移民社会における天理教伝道に関する一考察」『天理大学おやさと研究所年報』24、2018 年、25～46 頁。

19）たとえば、高橋典史『移民、宗教、故国―近現代ハワイにおける日系宗教の経験』、ハーベスト社、2014 年など。

20）東、前掲書、21 頁。

21）同上、22 頁。

22）天理大学附属おやさと研究所『天理教事典　第三版』、天理大学出版会、2018 年、17 頁。

23）尾上、前掲論文、2017 年、25～46 頁。

24）高橋典史「日系移民社会と日系新宗教：ハワイの天理教の場合」『一橋研究』33（１）、2008 年、47～60 頁。

25）“Non-quota Immigrants.” Sec.4 (d), Immigration Act of 1924, United States Statutes at Large (68th Cong., Sess. I, Chap. 190), p.155.

26) “Nonquota Minister or Professor,” U.S. Department of State, *Admission of Aliens into The United States* No.926 General Instruction Consular, Diplomatic Serial, No.273 (Washington, D.C.: United States Government Printing Office, March 23, 1929), pp.50-51. https://babel.hathitrust.org/cgi/pt?id=osu.32435018772665&view=1up&seq=3&q1=Non-Quota%20Immigrants（2020 年 8 月 22 日アクセス）

27）「(二) 米国布教十年とビザの行方」天理教アメリカ伝道庁編『天理教米國布教十年史』、天理教アメリカ伝道庁、1938 年、附録 37～44 頁。

28）中西喜代造「ポートランド教会の設立…と北米への布教の話…（二)」『みちのとも』、1928 年 7 月 5 日、60 頁。

29）同上。

30）諸井忠彦「亜米利加伝道に対する書簡」『みちのとも』、1928 年 9 月 20 日、57 頁。

31）同上。

32）天理教布教師、布野光蔵の手記「私乃影」（２）、204～205 頁。天理教ワシントン教会 4 代会長木村昌人氏提供。

33）天理教名京大教会史料部編『天理教名京大教会史 後編第２巻』、天理教名京大教会、1963年、79 ～ 80 頁。
34）井上順孝『海を渡った日本宗教―移民社会の内と外』、弘文堂、1985年、25 頁。
35）吉澤実氏の親族である天理教信濃大町分教会長権田道男氏へのインタビュー、2020年8月15日。
36）この日記は、本稿の史料として、同上の権田道男氏から提供していただいた。
37）注30参照。
38）布野光蔵の手記、1929年４月の記録、186～187頁。「御道」とは天理教のことを指す。
39）吉澤実の日記、1931年５月31日。
40）布野光蔵の手記、1929年４月の記録、187頁。
41）吉澤実の日記、1932年10月８日。
42）同上、1934年７月２日。
43）戦時中アリゾナ州にあったヒラリバー収容所に関する政府当局の報告書には、ある天理教布教師が収容所の人々に「さづけ」を取り次ぐ様子が詳しく記されており、当時布教師によって行われていた病気治しの実際の様子がうかがわれる。Robert F. Spencer, “A Preliminary Analysis of the Role of Religion in the Gila Relocation Center,” Anthropology 244, (FBI, Winter 1943), p.47, Japanese American Evacuation and Resettlement Records, Bancroft Library, UC Berkeley, Filename: cubanc6714_b166k08_0050.pdf
http://cdn.calisphere.org/data/28722/59/bk0013c9559/files/bk0013c9559-FID1.pdf（2020年8月26日アクセス）
44）吉澤実の日記、1933年11月27日。「ミシン」は自動車を指す。
45）同上、1934年７月23日。
46）同上、７月24日。「房子」は吉澤実の妻。
47）高橋、前掲論文、57 頁。
48）「東西南北」『大陸日報』、1935年11月１日。
49）吉澤実の日記、1929年４月13日。
50）“Government Moves to Deport Japanese Priest,” *San Pedro News Pilot*, December 31, 1934.
51）諸井、前掲、57頁。
52）たとえば、吉澤実はオークランドでの1932年12月14日の日記に、「午前十時頃突然移民局来る」と記している。
53）高野友治「アメリカの伝道者たち」『みちのとも』、1977年11月、60頁。
54）“Rev. Tsuji Says Tenrikyo Mission Group Working for Social Welfare,” *Japanese American News*, July 26, 1939.
55）吉澤実の日記、1933年７月７日、「大町」は吉澤の実家。
56）同上、1934年12月９日。
57）中西喜代造「志那四億の民を如何に教化すべき」『みちのとも』、1925年２月20日、35頁。
58）鳥澤林蔵「米国に布教して」『みちのとも』、1929年10月20日、55頁。
59）鈴木亨「バンクーバー物語」『みちのとも』、1938年３月、49頁。
60）天理大学附属おやさと研究所、前掲書、481頁。
61）東、前掲書、379頁。
62）天理教の迫害の歴史については、飯田照明『天理教の迫害・受難史』、飯田照明、2016年を参照。
63）「北米より遥々　教校別科に入学した人々　岡崎よね子さんの話」『みちのとも』、1928年９月20日、64頁。
64）布野光蔵の手記、1929年２月19日の記録、165～166頁。
65）吉澤実の日記、1934年５月20日。
66）Spencer, Robert F., “Religious Life in the Gila Community,” (November 2, 1942) pp. rr-tt,

Japanese American Evacuation and Resettlement Records, Bancroft Library, UC Berkeley, Filename: cubanc6714_b166k08_0051.pdf,
http://cdn.calisphere.org/data/28722/59/bk0013c9559/files/bk0013c9559-FID1.pdf（2020 年 8 月 26 日アクセス）

67）『日米』、1935 年 12 月 17 日。

68）『新世界朝日新聞』、1935 年 12 月 18 日。

69）『新世界』、1931 年 10 月 25 日。

70）『日布時事』、1932 年 7 月 27 日。

71）山田亜紀『ロサンゼルスの新日系移民の文化・生活のエスノグラフィ』、東信堂、2019 年、177 頁。

72）同上、39 頁。

【参考文献】

Azuma, Eiichiro. *Between Two Empires: Race, History, and Transnationalism in Japanese America*. New York: Oxford University Press, new version, 2005.

Azuma, Eiichiro. *In Search of Our Frontier: Japanese America and Settler Colonialism in the Construction of Japan's Borderless Empire*. Oakland, CA: University of California Press, 2019.

Inouye, Daniel H. *Distant Islands: The Japanese American Community in New York City, 1876-1930s*. Louisville, Colorado: University Press of Colorado, reprint version, 2019.

Kashima, Tetsuden. *Buddhism in America: The Social Organization of an Ethnic Religious Institution*. Westport, Connecticut: Greenwood Press, 1977.

Schiller, Nina Glick and Thomas Faist ed. *Migration, Development, and Transnationalization: A Critical Stance*. New York: Berghahn Books, 2010.

Takaki, Ronald. *Strangers from A Different Shore: A History of Asian Americans*. Boston: Little, Brown, 1998.

Vertovec, Steven. *Transnationalism*. New York: Routledge, 2009.

Williams, Duncan Ryûken and Tomoe Moriya eds. *Issei Buddhism in the Americas*. Chicago, IL: University of Illinois Press, 2010.

Yamakura, Akihiro. "Transnational Contexts of Tenrikyo Mission in Korea: Korea, Manchuria, and the United States." *Belief and Practice in Imperial Japan and Colonial Korea*, edited by Emily Anderson, 153-176. Gateway East, Singapore: Palgrave Macmillan, 2017.

Yanagawa, Keiichi, ed., *Japanese Religions in California: A Report on Research Within and Without the Japanese-American Community*. Tokyo: Department of Religious Studies, University of Tokyo, 1983.

東栄一郎『日系アメリカ移民　二つの帝国のはざまで―忘れられた記憶 1868-1945』（飯野正子監訳、長谷川寿美他訳）、明石書店、2014 年。

飯田照明『天理教の迫害・受難史』、飯田照明、2016 年。

飯野正子「BC 州の仏教会と日系カナダ人コミュニティ」『東京大学アメリカ太平洋研究』第 2 号、2002 年、45～61 頁。

イチオカ・ユウジ『抑留まで―戦間期の在米日系人』、彩流社、2013 年。

井上順孝『海を渡った日本宗教―移民社会の内と外』、弘文堂、1985 年。

尾上貴行「戦前のアメリカ日系移民社会における日系宗教：天理教の展開とその特徴について」

『天理大学おやさと研究所年報』23、2017 年、25～46 頁。
尾上貴行「戦前から戦後復興期のハワイ日系移民社会における天理教伝道に関する一考察」『天理大学おやさと研究所年報』24、2018 年、25～46 頁。
「更生運動の再検討―松村先生との一問一答―」『みちのとも』、1935 年 7 月 5 日。
金光清治「北米日本人移民の信仰と生活世界」『金光教学』37、金光教教学研究所、1997 年、85～142 頁。
在米日本人会事蹟保存部編纂『在米日本人史（２）』復刻版、PMC 出版、1984 年。
島田法子「ハワイにおける日系仏教にみる文化変容とアイデンティティ」『立教アメリカン・スタディーズ』25、2003 年、33～51 頁。
鈴木亨「バンクーバー物語」『みちのとも』、1938 年 3 月、45～49 頁。
高橋典史「日系移民社会と日系新宗教：ハワイの天理教の場合」『一橋研究』33（１）、2008 年、47～60 頁。
高橋典史『移民、宗教、故国―近現代ハワイにおける日系宗教の経験』、ハーベスト社、2014 年。
高野友治「アメリカの伝道者たち」『みちのとも』、1977 年 11 月、60 頁。
天理教アメリカ伝道庁編『天理教米國布教十年史』、天理教アメリカ伝道庁、1938 年。
天理教名京大教会史料部編『稿案　名京史　後編　第二巻』、天理教名京大教会史料部、1963 年。
天理大学附属おやさと研究所『天理教事典　第三版』、天理大学出版会、2018 年。
同志社大学人文科学研究所編『北米日本人キリスト教運動史』、PMC 出版、1991 年。
戸上宗賢編著『交錯する国家・民族・宗教：移民の社会適応』、不二出版、2001 年。
鳥澤林蔵「米国に布教して」『みちのとも』、1929 年 10 月 20 日。
中西喜代造「志那四億の民を如何に教化すべき」『みちのとも』、1925 年２月 20 日。
中西喜代造「ポートランド教会の設立……と北米への布教の話……（二）」『みちのとも』、1928 年 7 月 5 日、58～62 頁。
「北米より遥々教校別科に入学した人々　岡崎よね子さんの話」『みちのとも』、1928 年 9 月 20 日、63～65 頁。
本多千恵「キリスト教社会における日本宗教の布教ストラテジーと適応」『年報社会学論集』第 7 号、1994 年、73～84 頁。
南川文里「アメリカ合衆国における『ジャパニーズ』の類型化―トランスパシフィックなエスニシティ理解のために―」米山裕、河原典史編『日本人の国際移動と太平洋世界―日系移民の近現代史』、47～70 頁、文理閣、2015 年。
諸井忠彦「亜米利加伝道に対する書簡」『みちのとも』、1928 年 9 月 20 日、53～57 頁。
山倉明弘「在米天理教布教師戦時抑留のトランスナショナルな文脈―満州、日本、アメリカ―」『アメリカスの天理教―南北アメリカにおける伝道の諸相と展望』、1～49 頁、天理大学附属おやさと研究所、2011 年。
山田亜紀『ロサンゼルスの新日系移民の文化・生活のエスノグラフィ』、東信堂、2019 年。
山田政信『新宗教のブラジル伝道』、天理大学附属おやさと研究所、2018 年。

【参考ウェブサイト】
Calisphere, University of California. https://calisphere.org/（2020 年 8 月 26 日アクセス）

Densho「日系アメリカ人」. http://nikkeijin.densho.org/legacy/index.htm（2020 年 8 月 26 日アクセス）

HathiTrust. ‘Hathi Trust Digital Library.’ https://www.hathitrust.org/（2020 年 8 月 26 日アクセス）

Hoover Institution Library & Archives, Stanford University. ‘Hoji Shinbun Digital Collection.’ https://hojishinbun.hoover.org/（2020 年 8 月 26 日アクセス）

Tenrikyo Mission Headquarters in America & Canada. https://tenrikyo.com/（2020 年 8 月 26 日アクセス）

The Regents of the University of California. ‘California Digital Newspaper Collection.’ https://cdnc.ucr.edu/（2020 年 8 月 26 日アクセス）